

愛知県地方の方言の分派とその系脈

江 端 義 夫

目 次

- はじめに
- I 分派認定の手順
- II 事象分布事象
- III 主要分布傾向
- IV 方言分派
- V 方言分派系脈論
- VI 方言古系脈
- おわりに

○ はじめに

1. 目 的

日本語方言の東西二分派が接衝する地域に、いわゆる中部方言がある。中部方言の下位に、愛知県地方の方言が存立する。

本稿では、愛知県地方の方言の分派を認定し、その系脈を明らかにすることを目的とする。

2. 本研究での方言調査法

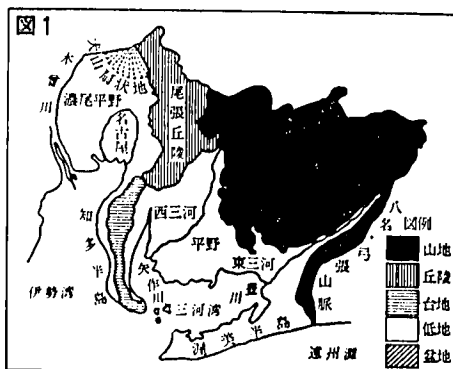
私は本研究のために、各調査地点ごとに、老年層と少年層との二層にわたって、285の調査項目についての質問調査をおこなった。私一人がすべての臨地調査をおこなった。調査期間は、昭和41年8月から昭和43年1月までである。のちに、数地点の第二次調査をおこなった。延べ日数は130日、調査地点は80である。この調査の結果によって作製した方言事象分布図は、老年層図と少年層図とをあわせて、600図である。

以下の考察では、この方言事象分布図と、被調査者の発話を記録した自然傍受資料とを適宜に用いる。

3. 地理的文化的事情

一般に、関東地方と近畿地方とに挟まれた新潟・富山・石川・福井・長野・山梨・岐阜・愛知・静岡の九県を含む地方が、中部地方と呼ばれている。愛知県は、近畿地方に隣接し、中部地方の西南端に位置する。

愛知県の地形は、西部と東部との二つに大きく見分けられる。西部には広大な濃尾平野があり、西南部には100メートル以下の尾張丘陵が知多半島へと連なり伸びている。東部には三河平野があり、東部の三河高原が600～700メートルの高さで、三河北部にかなり広い地域を占めている。



主要道路は、名古屋・岡崎・豊田・豊橋・田口を軸点として、放射状に伸びている。

県下の主産業は農業と工業とである。

昭和40年の国勢調査の報告によれば、人口増加は名古屋市・春日井市・豊田市・豊橋市・一宮市などで著しい。人口減少は三河北東部一帯の市町村で著しい。東加茂郡・北設楽郡のほか、渥美半島の渥美郡の全町村および幡豆郡・知多郡・海部郡の一部町村でも人口が減少している。

以上の地理的文化的諸事情は、愛知県地方に見られる方言の内実と、深く結びついでいよう。(図1)

I 分派認定の手順

1. 分派の定義

分派は、諸方言事象の著しい累積分布に認められる方言境域である。

2. 分派認定の手順

各方言事象分布図について、諸事象分布の分布関係相を的確に見わける。つぎに、多くの事項・項目例について、分布関係相を見あつめ見とおしていけば、分布傾向を見さだめることができる。傾向分布の累積が認められる境域に分派を認定する。

3. 分派認定のための規準項目

分派の認定は、発音・文法・語詞関係の多くの諸事象分布をとともに重視しつつ、客観的におこなわなければならない。発音・文法関係の諸事象分布は、大まかな様相を呈し、語詞関係諸事象は、分布相が大小さまざまである。私製の諸事象分布図を、私が総覧した体験

によれば、語詞関係の諸事象の分布相は、発音・文法関係の諸事象の分布相の上に、抵触することなく乗る。

私は、発音・文法関係項目によって、以下の規準項目をとりそろえた。これらは、言語諸現象のうち、基本的な現象を示すものであり、かつ、当地方域で明確な分布事象が認められるものである。

発音関係—89項目

○語アクセント (81) ○カ°行鼻音 (5)

○/Cai/ 連母音 (3)

文法関係—43項目

○敬語法 (5) ○文末詞法 (3) ○推量法 (1)

○勧誘法 (1) ○伝聞法 (1) ○打消法 (1)

○副助詞法 (1)

285項目の中から、以上の132項目を選択した。

II 事象分布事態

ここでは、さきにとりあげた分派認定のための規準項目について、当該地方における事象分布の分布関係相を見る。

一 発音関係の事象分布

1. 語アクセント

語アクセントの老・少分布図162図を見通すと、顕著な7つの分布域が帰納される。

① 「イ^アチガ」(命)などの分布域

これは、尾張・西三河が主域である。共通語で「○○○▷」となる三音節名詞第五類の語を、「○○○▷」と発音する。「イ^アチガ」「ナミ^ダガ」「カ^レガ」(蝶)「コ^コロガ」のようである。

② 「ア^マイ」(甘い)などの分布域

これは、三河全域と知多半島とが主域である。三音節形容詞第一類の語を、「ア^マイ」「ウ^スイ」「ト^オイ」のように発音する。共通語と同じ平板式の語アクセントが見られる。

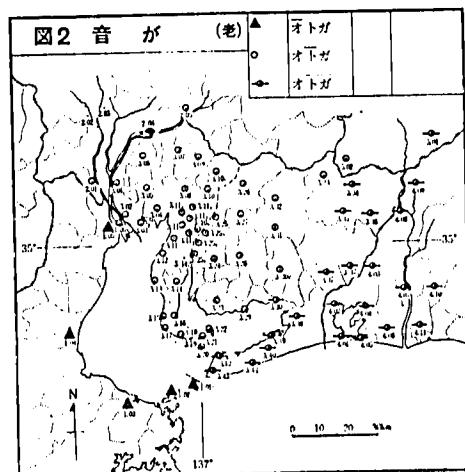
③ 「ア^マイ」(甘い)などの分布域

尾張北部の濃尾平野に見られる。知多半島にも淡く分布する。三音節形容詞第一類の語を、「ア^マイ」「ウ^スイ」「ト^オイ」など、中高に発音する。また、「コムギガ」「チ^カラガ」のようにも発音しがちである。

④ 「オ^トガ」(音)などの分布域

東三河・遠江では、二音節名詞第二類の語を、「オ^トガ」「ウ^タガ」「フ^ニガ」と発音する。また、個別事象も、「ツ^ルベガ」「チ^カラガ」「カ^ナシム」と発音する。

尾張北部では、第2音節めを卓立させがちなのに対して、東三河では、そのアクセントの山を後方へ連続させて発音しがちである。(図2)



⑤ 「ラ^カイ」(若い)などの分布域

これは、愛知・静岡の県境あたりを西限として、それよりも東側に分布がたどられ、遠江を主域とする。「ラ^カイ」「タ^カイ」「ヒ^クイ」「オ^ーイ」のように、三音節語の最初の音節を高く発音しがちである。また、「ヤ^キル」「下^ケル」のようにもおこなわれる。

⑥ 「ア^タマガ」(頭)などの分布域

これは、愛知・静岡両県の県境周辺に、濃淡の不明な分布を見せる。④と⑤との混在である。したがって、「ア^タマガ」「コ^コロガ」「セ^ナカガ」と、「カ^レガ」「ウ^タガ」「フ^ニガ」との両方のパターンが見られる。

⑦ 「チ^ーガ」(血)などの分布域

伊勢沿岸・志摩島嶼にまよってみられる分布である。長良川を境にして、西がわの三重県に京阪式語アクセントがおこなわれる。「チ^ーガ」(血)「カ^ーガ」(蚊)「ヒ^ーガ」(日)「ユ^ーガ」(湯)「ユ^ーガ」(絵)「ウ^ッガ」「キ^ズガ」「ク^シガ」(櫛)「ハ^ナガ」(花)などがこれである。

以上、7つの語アクセント分布域に、老年層図と少年層図との差違は認められない。

2. カ°行鼻音

鏡の「カ°」などの通鼻音[ŋ]が、尾張北部と、飛んで渥美半島以外の、豊橋市以北の東三河にある。この分布は遠江につづく。少年層では、衰退分布を示し、しだいにカ°行鼻音を言わなくなっている。

3. アイ連母音

/Cai/ 連母音の /Cææ/ 相互同化が、名古屋市を中心とする尾北地域にみられる。尾張と三河との境にある境川を越えて、西三河にもわずかにこれが認められる。尾南地域の知多半島北部では、東海市横須賀町あたりまで聞かれる。

つぎに、愛知県海部郡八海村塩田の老女の発音をあ

げる。

- [tʃikæə] (近い), [næ:ɪ] (無い),
- [wakæ:ɪ] (若い), [dzutsunæə] (術ない),
- [sæəpɔ] (最後), [tæ:ɪpæ:ɪ] (たいてい)

尾北地域のうち、尾張北部丘陵地帯(瀬戸市・春日井市・東春日井市・愛知郡)には、発音の注目すべき事態がある。春日井市には、/Cææ/ 音がある。瀬戸市では [æ] は聞かれず、むしろ、/Cai/ とはっきり発音するか、/Caa/ と順行同化を見せるかのどちらかである。県下で /Caa/ と順行同化を見せる所は、他にはない。

/Cai/ 連母音の /Cee/ 同化が、知多半島中南部・知多三河島嶼(篠島・日間賀島・佐久島)・渥美半島南部・渥美湾辺に見られる。いわば南部辺境地に、/Cee/ 同化が著しい。老・少ともにこの習慣がある。「チーサー」(小さい)、「オソゲー」(こわい)などと発音する。

しかし、語によって /Cai/ 連母音に同化非同化の区別が見られる地方と、/Cai/ 連母音の見られる部位に必ず一定の同化が生じる地方とがある。尾張北部では「貝殻」を「ヶーカハラ」と発音するが、前述の辺境地では「ヶーガラ」とは言わずに、「カイガラ」「カンギラ」と言う。

当該地方の /Cai/ 同化事態から見て、/Cææ/ の方が、/Cee/ よりも古くからの基質的要素であると推察することができよう。

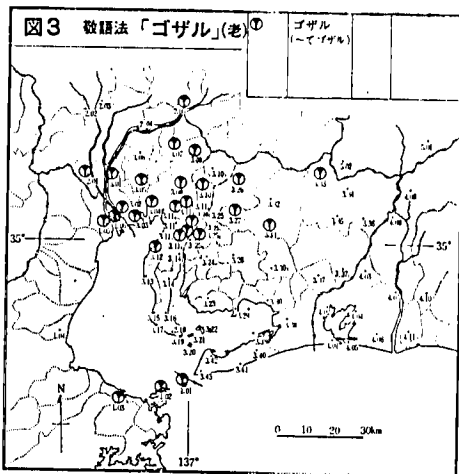
二 文法関係の事象分布

1. 敬語法

愛知県地方の方言における文法関係諸事項のうち、敬語法の諸事象項目は、別して重要な地位に立つ。今は、5事象項目について考察する。

① 「ゴザル」敬語法

○ナクト アフ ヒトガ ツレー ゴザル ヅ。



泣くとあの人が連れに来られるよ。

○センセーガ ワラッテ ゴザツタゲナ。

先生が笑っておられたそうだ。

○オマエモ ゴザレト コキヤガルダ ワ。

おまえもおいでと言やがるんだよ。

これらは、知多半島北部の例である。「ゴザル」敬語法は、尾張北部を中心に、さかんにおこなわれている。その分布の枝は、知多半島の中北部と西三河および東三河の北部に及び、岐阜県へと続く。しかし、少年層の分布図には、数地点しか見られない。少年層者にとっては、「ゴザル」動詞はもはや古風なものとなつていよう。(図3)

② 「オ帰リル」敬語法

これは三河本位に分布する。東三河を主城とし、西三河東半を含み、渥美半島の中部にも見られる。少年層図には、分布がほとんど認められない。

さて、当分布域には、いわゆる連用形敬語法がある。たとえば、動詞連用形を「帰リタラ」のように使えば、「帰られたら」の意の敬意表現になる。私見によれば、「オ帰リル」は、「オ帰リアル」の「ア」が脱落して、「オ…ル」になったものであろう。古来の「オ…アル」敬語法は、当地方で、つねに「ア」を除在させ、いわゆる連用形敬語法の形をとっておこなわれているのである。

③ 「オイデン」(来なさい)・「オクレン」(ください)敬語法

「オ…ナサイ」の「ナサイ」助動詞が変化して、「オイデナ・オクレナ」→「オイデン・オクレン」ができたと思われる。老・少年層図ともに、三河全域に分布がつよく見られる。「オイデン・オクレン」は、分布が知多半島の東側沿岸と佐久島ともに見られる。これらは、三河方言色の基質がうかがわれる代表的な事象である。

④ 「ヤス」敬語法

「見なさい。」を「見ヤー。」と言う。「ヤス」敬語法は、尾北を主城とし、尾張全域に分布する。名古屋市中川区中郷町での実例を記す。

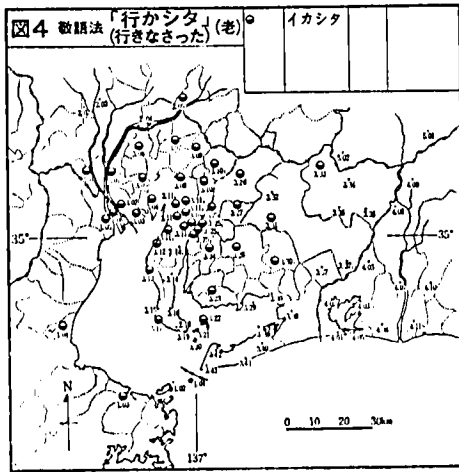
○デテ リヤー。 出て来なさい。

○ドロト ナマリガ アルト ミエル ワ。トキキ
ヨーコトバオ ツカヤーテモ。 どころなく蹴りがあるらしいわ。いくら東京言葉を使いなしても。

「ヤス」敬語法の隆盛を見ることができる。少年層図も、老年層図のとはほぼ同じ分布相を見せる。

⑤ 「シャル」(「セル」)敬語法

「シャル(サッシャル)」敬語法は、両半島先端と知多三河島嶼に残存分布を見せる古態の事象である。少



年層図では、老年層図に比して、分布ははるかに少ない。知多半島先端部の南知多町に2地点と、鳥羽答志島に1地点の合計3地点だけである。

「シャル」敬語法の変化した「セル」敬語法がある。尾張北部・西三河には、「行かセル・行かシタ」などの「セル」敬語法が分布する。(図4)

2. 文末詞法

近畿地方では、一様に「アノ ナー。」などの「ナー」文末詞がよくおこなわれている。

尾張北部には、「ヨー」と「ナモ」と「ナー」とが著しい。

知多半島は、尾北の影響を受けて、「ナモ」「ナー」をいくらか見せる。また、西三河のと融合して「ナン」文末詞をさかえさせている。

渥美半島を主城として、「ノン」文末詞が目立つ。その分布は北上して東三河全域に及ぶ。

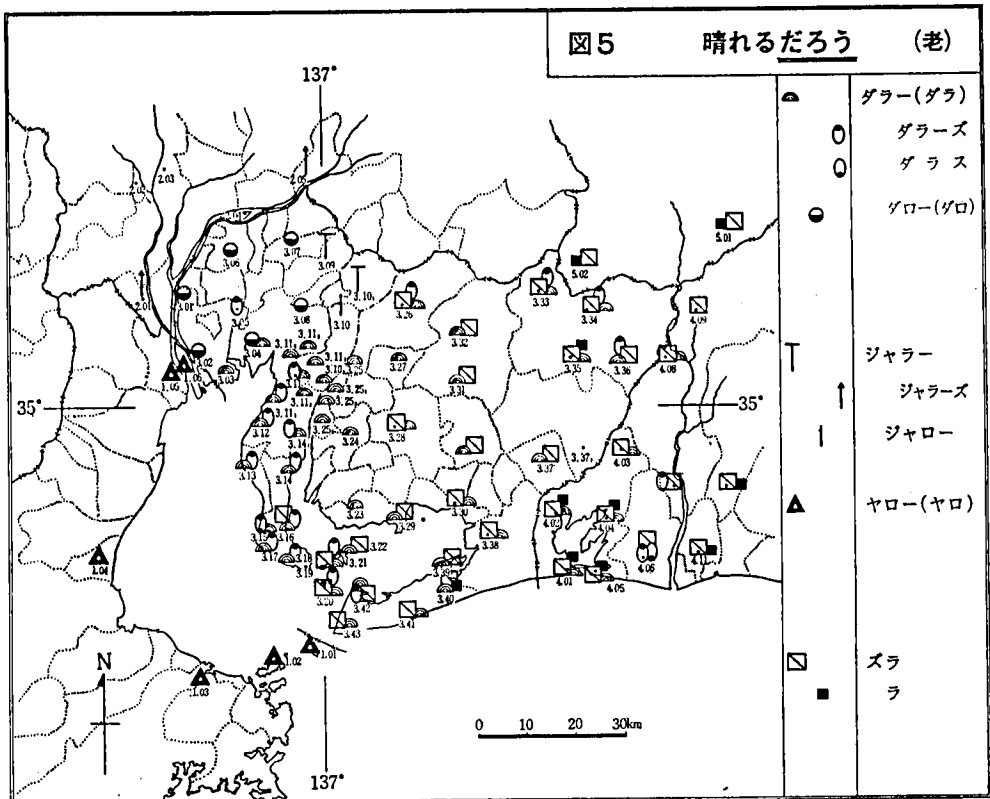
「ノー」は三河を中核域とし、「ナー」は近畿を中核域とする。双方の文末詞は対立分布を見せ、知多半島で交錯する。

3. 断定法

「トンボだ。」と指定断定するもの言いは、木曾川を境にして、東の「ダ」と、西の「ヤ」とが明確な対立分布を示す。これは、少年層図の分布でも同じである。「ジャ」が「ダ」と「ヤ」の中間地域にわずかに分布している。また、三重県の神島・答志島は「ジャ」であり、尾北の瀬戸市・愛知郡・春日井市などにもこれが見られ、本格的な「ジャ」の分布域の岐阜県へとつづく。老年層で「ジャ」を見せていた地点は、少年層で「ヤ」として変わった。「ジャ」→「ヤ」の推移を識得することができる。

4. 推量法

「明日は晴れるだろう。」など、推量の助動詞の見



られる推量表現を問題とする。

「ジャロ」「ジャロー」「ジャラー」「ジャラーズ」の分布が、岐阜県・瀬戸市・春日井市・愛知郡などにある。尾張丘陵地の特異性は、岐阜県多治見市と愛知県の瀬戸市とが、古来、窯業を通じて頻繁な交易をもっていたことによるかと思われる。

「ダロ」「ダロー」の分布が、尾北の濃尾平野一带にある。

「ダラ」「ダラー」「ダラーズ」「ダラス」の分布が、知多半島と三河全域に濃く、強く認められる。

「ズラ」の分布が、三河全域にまんべんなくあり、遠江にも見える。知多三河島嶼と河和にも見られる。

「ラ」の分布が、奥三河と南部の渥美郡とにいくらか見られる。「知っているラ。」(知っているでしょう?)などの「ラ」の分布は、東三河全域に強く見られる。少年層図では、老年層図よりも分布域が広がっている。「晴れるだろう」の項目においても、少年層図では、東三河全域に「ズラ」が減って「ラ」が多くなっている。「ズラ」→「ラ」の自然推移を認めしめうる。(図5)

5. 勧誘法

「海へ行こうよ。」を「イコマイ」とする分布が、尾北・知多半島・西三河などに広く認められる。尾北部ではすでにすたれようとしているが、三河では、西か

ら東へと浸潤しつつある。

三河には「イカマイ」が存し、知多・三河・遠江に広く分布している。少年層図では、「イカマイ」の分布が知多・西三河ともに減退して、「イコマイ」に変わった。あるいは、共通語的に「イコー」と言うようになった。

しかし、ここで注目すべきは、「イクマイ」事象の分布である。「イクマイ」は老年層でわずか2地点存しただけである。ところが、少年層では岡崎市と渥美半島とに、これが広く分布していて興味ぶかい。

「イカマー」は「イカマイ」の首訛である。/Cai/連母音の/Cee/同化傾向が著しい知多半島南部と知多三河島嶼とに見られる。

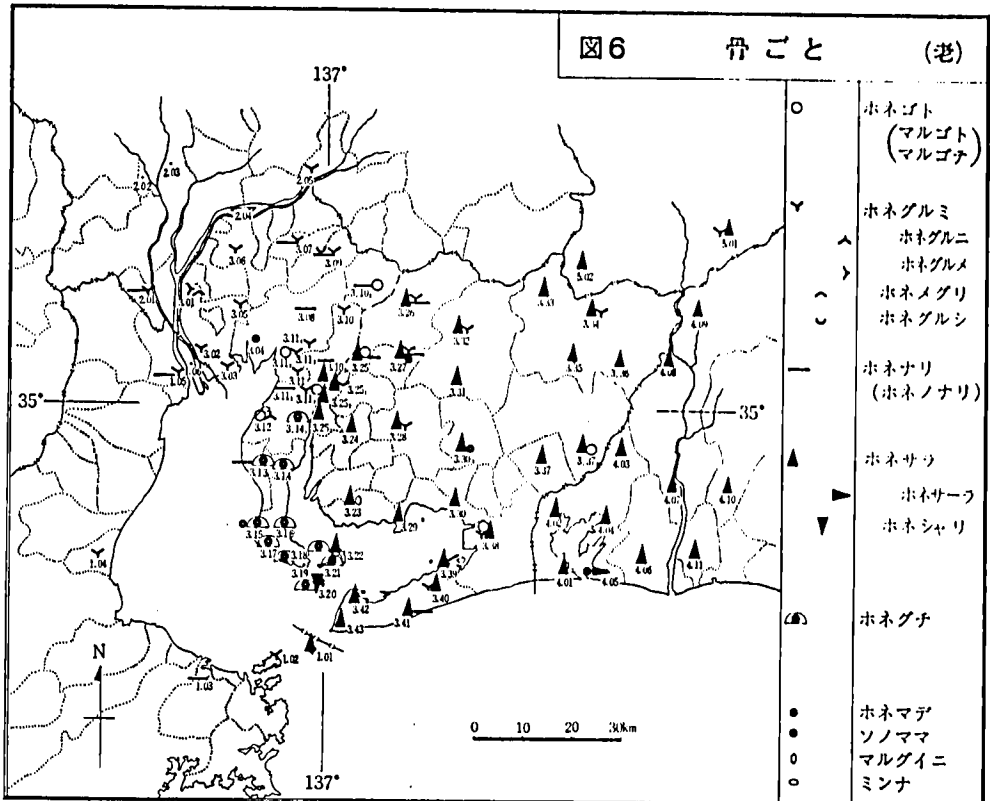
6. 伝聞表現法

「その松の木は50年前に植えたそうだ。」という時の「そうだ」が問題とされる。

「ゲナ」が老・少ともに当該地方の全域でおこなわれる。渥美半島全域では、老・少ともに「ゲナ」を、「ゲーナ」と長音化させる。

7. 打消法

「行かなかった」という打消過去表現法の分布域がある。老・少ともに、全域で「イカンダ」がおこなわれている。少年層は、「イカンカット」をも全域で



さかえさせている。伊勢沿岸で「イカンダ」「イカヘンダ」が老・少に見られる。知多半島と西三河に「イカンダッタ」の老年層の分布が強い。尾張北部では、老・少ともに「イケセナダ」類の言いかたをさかえさせている。打消法は変相に富み、複雑である。

8. 副助詞法

「小魚は骨ごと食べる。」という時の、副助詞「ごと」が問題とされる。

愛知県全域と伊勢沿岸に、「骨ナリ」「骨グルミ」「骨グルメ」の弱い分布が見られる。三河全域と遠州には、老・少ともに「骨サラ」の強力な分布が見られる。

「骨グチ」が知多半島だけに分布する。少年層図では、分布がやや少なくなっている。(図6)

III 主要分布傾向

諸事象分布の累積によって、当該域内に種々の分布傾向が見られる。それらの分布傾向の中から主要なものを導き出す。

以下、帰結された主要分布傾向は、語詞関係の区分とした諸分布様態を包括しうるものである。そこで、各分布傾向を醸成した発音・文法関係の諸事象に、語詞関係の諸事象を加えて記述する。

① 伊勢沿岸分布傾向

長良川を境にして、伊勢沿岸に見られる。②愛知県傾城分布向を特立させた分布傾向である。

発音…○京阪式語アクセント

文法…○文末詞法「ナー」(老)(少) ○断定法「ヤ」(老)(少) ○推量法「ヤロー」(老)(少) ○打消法「イカンダ」「イカヘンダ」(老)(少)

語詞…○「ナンバ」(とうもろこし)(老)(少) ○「パイ」「バパイ」(まぶしい)(老)(少) ○「ヨーケ」「ロケー」(たくさん)(老)(少)

② 愛知県域分布傾向

愛知県全域に、諸事象分布の強力な累積が見られる。周辺諸県から特立した一大「方言」的傾向が認められる。

発音…○東京式語アクセント

文法…○断定法「ダ」(老)(少) ②伝聞法「ゲナ」(老)(少) ○打消法「イカナンダ」(老)(少) 「イカンカット」(少) ○副助詞法「骨ナリ」「骨グルミ」「骨グルメ」(老)(少)

語詞…○「イナウ」(かつぐ)(老) ○「カンコース(セル)」(考える)(老)(少) ○「ハシヤグ」(川の水がなくなる)(老) ○「メメズ」(みみず)(老)(少) ○「チャト」(急いで)(老)(少) ○「オソガイ」(恐ろしい)(老)(少)

③ 尾北分布傾向

尾張北部の平坦な濃尾平野一円を分布領域とした分布傾向である。

発音…○「アマイ」などの第二音節め卓立傾向の語アクセント(老)(少) ○カ^ハ行鼻音(老) ○/Cai/ 連母音の /Cææ/ 同化(老)(少)

文法…○敬語法「ゴザル」(老)(少) ○敬語法「ヤス」(老)(少) ○敬語法「イカシタ」(老)(少) ○文末詞法「ヨー」「ナー」「ナモ」(老)(少) ○推量法「ダロー」(老)(少) ○勧誘法「イコマイ」(老)(少) ○打消法「イケセナダ」(老)(少)

語詞…○「メメゾ」(みみず)(老)(少) ○「コーライ」「コーレー」(とうもろこし)(老) ○「ツル」(二人で持ちあげる)(老)(少) ○「インチャン」(石傘)(老) ○「ハサ」(稲架)(老)(少) ○「ヒドルイ」「ヒドリー」(まぶしい)(老)(少)

④ 知多・三河分布傾向

尾張北部地方以外の愛知県域に認められる分布傾向である。尾北分布傾向と対立する。

発音…○「アマイ」など(三音節形容詞第一類)の東京式語アクセント(老)(少)

文法…○文末詞法「ノー」(老)(少) ○推量法「ダラー」(老)(少)

語詞…○「テング(ク)ルマ」(肩車)(老)(少) ○「オトマシー」(もったいない)(老)(少)

⑤ 東三河分布傾向

渥美半島を内包した東三河地方に、分布のまとまりが見られるものである。

発音…○「オトガ」などの平板化傾向の語アクセント(老)(少) ○カ^ハ行鼻音(老)

文法…○敬語法「オクレン」「オイデン」(老)(少) ○敬語法「オ帰リル」(老) ○文末詞法「ノン」(老)(少) ○推量法「ズラ」(老)「ラ」(老)(少) ○勧誘法「イカマイ」(老)(少) ○副助詞法「骨サラ」(老)(少)

語詞…○「ハンコ」「ハンコー」(袖なし)(老)(少) ○「トッカキ」「トッカケ」「トッカケ」(とかげ)(老) ○「イナムラ」「イナブラ」(稲叢)(老) ○「オトマシー」(かわいそうだ)(老) ○「コンキー」(息苦しい)(老)(少)

⑥ 渥美半島分布傾向

これは、豊橋市以南の渥美半島が分布域である。

文法…○勧誘法「イクマイ」(少) ○伝聞法「ゲナ」(老)(少)

語詞…○「ホーミー」(とうもろこし)(老)(少)

○「アリンド」(蟻)(老)(少) ○「ハダッテ」(わざと)(老)(少) ○「チャトコイテ」(急いで)(老)(少)

⑦ 奥三河分布傾向

東三河のうち、豊橋市以北の地域に分布のまとまりが見られるものである。

発音…○語アクセント個別事象「ココロガ」「ウタガ」「フユガ」「アタマガ」(老)(少)

語詞…○「ハザ」(稲架)(老) ○「コーシイモ」(馬鈴薯)(老) ○「ナンバンキビ」(とうもろこし)(老)(少) ○「キナイ」(黄色い)(老) ○「アリコ」(蟻)(老)(少)

⑧ 知多・西三河分布傾向

三河のうちの岡崎市を含んだ西三河と、知多半島および知多三河島嶼とが一体となって、一つの分布傾向をつくっている。

文法…○敬語法「オクレン」「オイデン」(老)(少) ○敬語法「オ帰リル」(老) ○敬語法「イカシタ」(老)(少) ○文末詞法「ナン」(老)(少) ○勧誘法「イコマイ」(老)(少) ○打消法「イカシダッタ」(老)

語詞…○「デンチコ」(袖なし)(老)(少) ○「スズミ」(稲藪)(老) ○「イセテ」「エセテ」「ヨセテ」(わざと)(老)(少)

⑨ 知多半島分布傾向

知多半島は尾張の辺境地である。半島南部と知多三河島嶼には、注目すべき諸事象が見られる。

発音…○/Cai/ 連母音の/Cee/ 同化の傾向(老)(少)

文法…○敬語法「ヤス」(老)(少) ○勧誘法「イカメー」(老) ○副助詞法「骨グチ」(老)(少)

語詞…○「トント」「トート」「トートキビ」(とうもろこし)(老)(少) ○「ツボケ」「ニヨ」「ニゴ」(稲藪)(老) ○「ズル」(二人で持ちあげる)(老)(少) ○「デンデングルマ」「デングルマ」(肩車)(老)(少) ○「ゴッコ」(おてだま)(老) ○「ササッテ」(しあさって)(老)(少) ○「アリンボ」(蟻)(老) ○「ヒドルイ」「ヒドリー」(まぶしい)(老)(少) ○「チャトコイテ」(急いで)(老)(少) ○「ジット」(いつも)(老)(少)

⑩ 西三河分布傾向

岡崎平野を中心とした西三河一帯に見られる。

発音…○「イアチガ」などの第二音節め卓立傾向の語アクセント(老)(少)

文法…○敬語法「ゴザル」(老) ○敬語法「イカシタ」(老)(少) ○敬語法「オ帰リル」(老) ○敬語法「オクレン」「オイデン」(老)(少)

○推量法「ズラ」(老) ○副助詞法「骨サラ」(老)(少)

語詞…○「トカケ」(とかげ)(老) ○「ホースルト」(そうすると)(老) ○「オソイ」(粗悪な)(老)

以上、分布領域本位に方言諸事象を把握して、10種の分布傾向が認出された。

IV 方言分派

一 分派の認定

分派次元から見て、主要分布傾向の認められる境域は分派と称される。

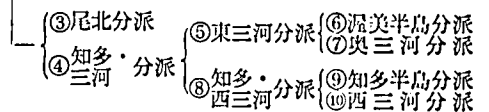
愛知県地方の方言に、伊勢沿岸分派、愛知県域分派、尾北分派、知多・三河分派、東三河分派、渥美半島分派、奥三河分派、知多・西三河分派、知多半島分派、西三河分派の10分派が認定される。

二 方言分派図

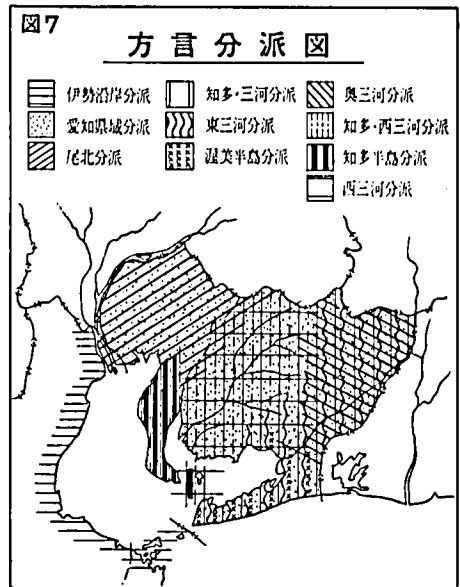
諸分派は、強力な分派に対応する弱小の分派という対応関係を骨子とした層序的な構造を成す。諸分派を動的に把持し、系統関係を表にあらわせば次のとおりである。

①伊勢沿岸分派

②愛知県域分派



つぎに、方言分派図で、諸分派の系統関係をあらわす。(図7)



V 方言分派系脈論

諸方言分派は相互に対立しつつ、相関しあっている。ここでは、分派間のつながりについて考察する。

以下、伊勢沿岸分派を〔伊〕、愛知県域分派を〔愛〕、尾北分派を〔尾北〕、知多・三河分派を〔知三〕、東三河分派を〔東三〕、渥美半島分派を〔渥〕、奥三河分派を〔奥〕、知多・西三河分派を〔知西三〕、知多半島分派を〔知〕、西三河分派を〔西三〕と略記する。

一 伊勢沿岸分派と愛知県域分派

〔伊〕と〔愛〕との分布連関が問題とされる。

○〔伊〕・〔愛〕に、「眠くてヨー起キレン」(老)(少)などの「よう〜ん」式不可能表現が見られる。奥三河・遠江以東にはこれがない。

○西三河以西の愛知県と〔伊〕には、制止の言いかたに「アカン！」がある。東三河・遠江以東は「ダメダ！」である。「イカン！」は当地方域の全域に見られる。

○双方の分派が概してむらのない分布相を見せる事象に、伝聞の助動詞「ゲナ」(老)(少)がある。「ゲナ」(そうだ)は、伊勢・愛知・静岡・周辺域に広くおこなわれている。

○「イカナダ」(行かなかった)が当該地方域全域にある。少年層では「イカナダ」「イカンカタ」の両方をさかえさせている。

○「たいくつだから」などと、原因・理由を表わす接続助詞「から」は、当該地方域全域で「〜デ」(老)(少)である。「困るから」は「コマルデ」と言う。

○条件法「雨が降らなければ」を、「降らニャー」とするのは三河である。「降らナ」とするのは尾張・伊勢である。少年層図においては「降らナ」が勢力を拡大している。

○意志表現「行かねばならない」を、「イカナいかん」「イカンならん」(老)(少)とおこなうのは〔伊〕と尾張とである。三河東半島以東は、新しい言いかたの「イカニャー」「イカナキャー」をおこなう。

○「たくさん買う」という時、「ヨーケ」「ヨケー」(老)(少)が、〔伊〕と尾張とでおこなわれる。「ギョーサン」「タント」「ターント」(老)(少)が、愛知県以東でおこなわれる。

二分派の系脈関係の特色を、次のように言いかえることもできよう。

〔伊〕は言語の根幹部分において、〔愛〕と顕著な対立を示すか。

日本語方言に東西二分派がある。西部方言分派の特色の多くが、〔伊〕と愛知県域の尾張に見られ

る。愛知県全域には及びきっていない。

尾張は、西部方言的特色と東部方言的特色と、さらに愛知県のと言え言える特色とを調和せしめている。

共通語的事象は、愛知県の東部に見られがちである。愛知県の西部には、比較的近畿色の強い方言事象が多く見られる。共通語諸事象が新しいとすれば、愛知県域分派は、内部相が西に古く東に新しいと言えようか。

二 尾北分派と知多・三河分派

ここでは、愛知県域分派内の二分派、〔尾北〕と〔知三〕の系脈が問題とされる。

〔尾北〕・〔知三〕は、ある種の語群について、対応関係が認められる。

〔伊〕	〔尾北〕	〔知三〕
トオイ	トオイ	トオイ
ウスイ・ウスイ	ウスイ	ウスイ
アマイ・アマイ	アマイ	アマイ
チカラガ	チカラガ	チカラガ・チカラガ
コムギガ	コムギガ	コムギガ

〔伊〕→〔尾北〕→〔知三〕の平板化傾向が推察されよう。

〔尾北〕と〔知三〕とのかかわりかたで注目されるのは、〔尾北〕が〔知〕と深くかかわる事象と、〔尾北〕が〔西三〕・〔東三〕と深くかかわる事象とがあることである。

〔尾北〕が〔知〕と系脈を同じくするのは、次の諸事象で知られる。

○敬語法「ヤス」(老)(少) ○「雨が降らナ」(降らねば) (老)(少) ○「ヒドロイ」「ヒドルイ」「ヒドリー」(まぶしい) (老)(少) ○「デンチ」(袖なし) (老)(少) ○「タイダイ」(わざと) (老)(少) 対して、〔尾北〕が〔西三〕・〔東三〕と系脈を同じくするのは、次の諸事象で知られる。

○敬語法「ゴザル」(老) ○敬語法「イカシタ」(老)(少) ○「ヤットカメ」(久しぶり) (老)(少) 二分派にかたよりなく分布している事象は多いが、これについてはさきに愛知県域分派で問題とした。

総じて、〔尾北〕と〔知三〕との系脈では、〔尾北〕の方言が〔知三〕のうちの〔知〕の方により強く波及する相が注目される。〔尾北〕には、京阪式アクセントを改新させる契機を成した点をはじめとする、創造的な面が認められる。かつ、諸事象を温存する保守的な面もある。

三 東三河分派と知多・西三河分派

ここでは、〔知三〕の内部分派系脈が問題とされる。

〔東三〕と〔知西三〕との相関で注目されるものの一つに、/N/音尾の文末詞がある。すなわち、〔東三〕に

「ノン」がさかえ、知西三に「ナン」がさかえている。他にも、「カン」「ゾン」「エン」「ワン」が兩分派によく見られる。この[D]末尾音は、やさしい訴えの効果をかもす。

四 渥美半島分派と奥三河分派

ここでは、東三の内部分派系が問題とされる。発音関係諸事象・語詞関係諸事象が、渥と奥との分布相を分立させがちである。他方、文法関係諸事象は、兩分派間に一様にたどられる。これの具体的な事例については、Ⅲ主要分布傾向が参照される。

つぎに、私が調査しえた限りで、渥・奥と遠江・信濃との相関を見る。

○勧誘法「イカマイ」(老)(少)は、渥・奥にあって、西三にもたどられ、知の中南部にまでたどられる。そして、それが遠江・信濃へものびて分布する。

○「シツドル ㄱ」ヲ。「シツテル ㄱ」(知っているでしょう?)などの推量助動詞「ㄱ」(老)(少)が、渥・奥に強く分布し、遠江・信濃へとたどられる。俗に「遠州のズラことば」と言われる。「ズラ」が三河全域におこなわれている。渥・奥と遠江・信濃との浅くない系派関係相を推察することができる。

五 知多半島分派と西三河分派

ここでは、知西三の内部分派系が問題とされる。知と西三とは、対立しつつ迷関する。知多・西三河分布傾向の存立自体が、双方間の著しい系派を表明しているのである。そして、知と西三とに見られる諸事象分布は、総じて尾北と東三との強力な余波を受容した分布相を見せているかに思われる。

つぎに、兩分派に、尾北と東三の接衝地域らしい相を見せている分布がある。

○「オンパコ」(おおばこ)(老)が愛知県地方全域にさかえ、東西に「オパコ」「オーパコ」(老)が見られる。その中で知・西三は、「オンパコ」(老)を生ぜしめている。

○打消法「イカナンダ」(老)が愛知県地方全域に見られ、西に「イカヘンダ」「イカンダ」「イケヘンダ」(老)があり、東に「イカナカタ」「イカンカタ」(老)がある。その中で、知・西三は「イカンダッタ」(老)(少)を生ぜしめている。

○愛知県地方全域に「テヌグイ」(手拭い)(老)があり、「テノゴイ」(老)が尾北の一部と渥南部そして知西三に見られる。その中で、知西三は、さらに「イ」音を脱落させて、「テノゴ」をも生ぜしめている。

東からと西からとの方言の圧力によって、知西三

は変形され、合成されもするのであろうか。方言の、方言生活の微妙が感得される。

Ⅵ 方言古系派

分派関係に古派の事態を認め、脈絡をたずねれば、そこに方言地質学的探究の一途として、方言古系派論が展開する。

一 古系派の帰結

愛知県地方の方言諸分派を大観する時、統体の深層に、四国南半から南紀を経て志摩半島にたどられた日本語方言古系派は、どのような方言古派を進展せしめていようか。

当該地方には、比較的古い層とすこし古い層との二つが認められる。

1. 比較的古い層

知多三河島嶼の一つ、篠島には古音 [ʃe] [se] がある。

○チガヤ シェン ジロ。 違いはしないよ。

○ジェンジェン イワン。 ぜんぜん言わない。
伊勢の志摩島嶼では、老・少ともに「シェンシェー」(先生)が見られ、篠島のによく通り。[ʃe] [se] は、もはや半島には見られにくく、島嶼に退存したのである。

また、愛知県下では、少年層図において、知多半島南部・知多三河島嶼だけに、/sabui/(寒い)、/keburi/(煙)がある。老年層図では、尾張中心に色濃く見られた二事象が、少年層図では上記の辺境地へ押しやられたのである。b>mの発音新化は一般に著しい。

また、国語史的には比較的新しいカ行鼻音が、尾張北部と東三河中北部にある。しかし、知多半島・知多三河島嶼・西三河・渥美半島にはこれがない。愛知県地方の東と西にカ行鼻音が遊離分布し、中間にこれがない事態は、どんな言語史を示唆するか。東三河中北部のカ行鼻音は、共通語の改新後に見われてきたものである。渥美半島はまだ改新波を受容しなかったのが古いと符える。尾北のカ行鼻音は東三河中北部のよりも歴史的には古いもので、かつて近畿から伝播したのを温存したものであろう。これが伝播しなかった知多半島・知多三河島嶼は、古態のままであろうか。

文法面でも、上記の発音面でのと同様に、古態遺存のさまが見られる。

○クワジャレ。 食べなさい。

○タベラッシャイ。 食べなさい。

○ヨー シゴトニ イカッシャル コトダ。 よくまあ仕事に行きなさいことだ。

この「シャル(サッシャル)」敬語法が、知多半島中南部・知多三河島嶼・渥美半島南部にある。少年層にもわずかに見られる。

また、推量表現「晴れるダラーズ。」が知多半島・知多三河島嶼・渥美半島南端に比較的好くおこなわれる。「ダラー」が知多・三河全域に、老・少ともにさかんな事態は前述した。これは古語法「だらう」の残存である。また、「行かむとす」語法を今日にとどめた「イカーズ」「イカズ」が、辺境地によく見られる。

以上、種々の古態が知多半島・知多三河島嶼・渥美半島に存した。尾張の辺境地が知多半島・知多三河島嶼であり、三河の辺境地が渥美半島である。尾張と三河と伊勢からの諸事象が、辺境地へ周布してふきだまり、そこに顕著な方言古脈を形成したのである。

2. すこし古い層

上述の古系脈に次いですこし古い言語地層が、尾張北部にある。

愛知県地方の方言語アクセントが、伊勢沿岸から尾北へ、さらに知多・西三河へ、そして東三河へと平板化の新化過程をたどっている事態を重視すれば、尾北部の古さが識得される。

また、文法面について見れば、近世の「ヤス」尊敬助動詞がさかんであり、「行かないで」を「イカスト」とするのも古い用法である。「歩きながら」を「アルキカテラ」とするのも古態である。古来の係助詞「ゾ」を生かした「ドコゾデ」(どこかで)が見られもする。

これらの古事象が、三河に分布する新化事象によって特立され、注目されるのである。かくして、尾北部が、当該地方方言状態にあって、すこし古態な方言地層を示して、辺境地の比較的古い系脈の上部表層に位置するという実態を認めうるのである。

二 方言古系脈図

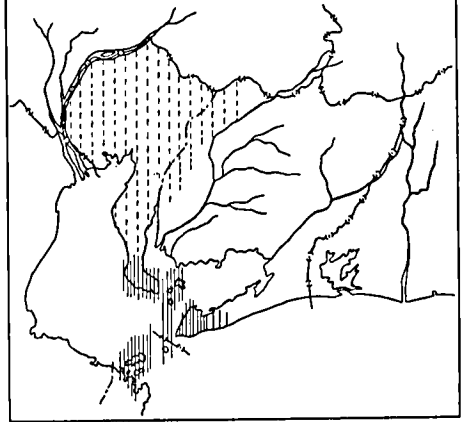
愛知県地方の方言の古系脈を図にあらわす。

縦線は比較的古い系脈であり、点線はそれについてすこし古い系脈である。

以上の古系脈を中心に、愛知県地方の方言諸分派の新古系脈関係について解説してみる。古系脈を赤色とすれば、知多半島中南部と知多三河島嶼と渥美半島南端は赤色である。尾張北部と知多北部と西三河北部は赤橙色である。西三河は橙色で、東三河は黄色である。緑色を新脈層あるいは新脈波とすれば、豊橋市を中心とした奥三河と岡崎平野とがやや薄めの緑色である。

図8

方言古系脈図



渥美湾や渥美半島は、すこし古態が見られるので黄橙色である。ここに、系脈関係が動的に直視される。

(図8)

〇おわりに

愛知県地方の方言をはじめとする中部方言は、まさに日本語方言成立史研究における重要な位置にある。

藤原与一先生は『方言学』(昭和37年刊、三省堂)に、“日本語方言の「分派」関係をたどっていった時、最後に(一南島方言のことは別として)大きくとりあげられるのが、東部方言と西部方言との対立である。

(中略)日本語方言状態の大様を見ると、最後に、消去しがたい、東西対立の様相がみとめられる。”と書いておられる。

私は、およばずながら東海道・中仙道を軸とした中部地方の方言調査・研究に従ってきた。今後は、中部地方の方言を精究することにつとめ、日本語方言の成立と実態という課題に、自らを戒めつつ答えていかねばならない。

私は日本語方言の研究を、従来の方言学の枠をこえて、広く一般言語学的に、かつ、人間言語学として試行し、庶民の心のことばを大切にする学問として育てていかねばならないと考えている。

(付記)

脱稿後、藤原与一先生のご高覧をたまわって、加筆訂正した。ここに記して、感謝の意をあらわす。

(1973.9.10)

The System of Dialects and the Relations among
Them in the Aichi Prefecture Area

Yoshio Ebata

In this paper I make it my chief aim to recognize the system of dialects in the Aichi Prefecture Area, and to grasp the relations among them.

I) In that area, the following ten main patterns of distributions of linguistic phenomena were found out of the linguistic maps which I investigated and made.

- pattern (1): Ise Coast District is predominant as a unit.
- pattern (2): no regional differences in Aichi Prefecture are markedly observed.
- pattern (3): the north part of Owari District is predominant as a unit.
- pattern (4): Chita-Mikawa District is predominant as a unit.
- pattern (5): Nishimikawa District is predominant as a unit.
- pattern (6): Atsumi Peninsula is predominant as a unit.
- pattern (7): Okumikawa District is predominant as a unit.
- pattern (8): Chita-Nishimikawa District is predominant as a unit.
- pattern (9): Chita Peninsula District is predominant as a unit.
- pattern (10): Nishimikawa District is predominant as a unit.

These are chief patterns, and a number of lower patterns are recognizable. Each main pattern in a number of maps indicates a dialect as the system of the language, and therefore the list of the patterns recognized above coincides with the system of dialects in that area.

II) Comparing the dialects one another, I recognized the relatively ancient linguistic phenomena in the south part of Chita Peninsula, Shinojima, Himakajima, Sakushima, and the south part of Atsumi Peninsula.